

## アビ・ヴァールブルクの装飾論

二宮 望 (京都大学)

本発表は、ドイツの美術史家アビ・ヴァールブルク(1866-1929)の装飾論について考察を行う。彼の研究の出発点となった博士論文で議論の中心的な役割を果たしたのは、「動く付帯物」と呼ばれる、風に翻る衣服や髪の毛の表現であった。この衣服や装飾についての考察は、ヴァールブルクが後に展開することになる「情念定型」や「ニンフ」といったモチーフの前史として重要な位置を占めており、これまでの先行研究においてしばしば議論の的となってきた。しかし、青年期に書かれた断章ノートを仔細に検討すれば、ヴァールブルクの装飾論はこういった動的表現の造形化という問題に限定されない広い射程を持っていることがわかる。そこで本発表では外的世界の象徴として機能する装飾という論点に焦点を当て、ヴァールブルクにおけるコスモスのイメージと身体という問題系の内実を明らかにする。

まず、装飾に関する記述が収められている草稿「基礎的断章」や「外延規定としての象徴主義」の背景を確認することから議論を始める。これらの草稿が書かれた1880年代末から1900年代までの数年間は、ヴァールブルクの人生にとって大きな転機となった時期である。フィレンツェで本格的な美術史研究に取りかかり、アメリカ・インディアンの調査を行うために新大陸へ渡ったのもこの時期に当たり、折に触れて彼は装飾に関する考察を深めていったのである。またG.ゼンパーやTh.カーライルの著作に対して、当時のヴァールブルクは強い興味を示し、そこから多くの知見を取り入れていた。例えば、S.パパペトロスがゼンパーの論文「装飾の形式的法則性と芸術的象徴としてのその意味」(1856)がヴァールブルクに与えた影響について詳述している。本発表で検討する装飾の象徴的機能という観点においても、ゼンパーからの影響を考察することができる。さらに、この装飾に関する思索はアメリカ・インディアンに関するテキストにおいて深化していくことになる。ヴァールブルクは、原住民の文化にあらわれる衣服や装飾の象徴的機能に注目し、そこから「蛇」というモチーフの重要性を指摘した。装飾の宇宙論的機能に関する洞察は、象徴的イメージの身体化という形をとって、占星術をめぐる議論において再び現れてくることになる。ここでは占星医学の領域でしばしばイメージ化されてきた「獣帯人間」を取り上げ、装飾や身体化といった観点から分析する。

以上の考察は、人類学的な射程を持って繰り広げられたヴァールブルクの心理学的なイメージ論の一端を明らかにするとともに、イメージや象徴が孕んでいる身体との両義的な関係をもあぶり出すことができると思われる。